

小網代の森と干潟を守る会
小網代 森と干潟つうしん



森も海も干潟も 奇跡の集水域生態系を未来の子どもたちへ
小網代の森と干潟を守る会
〒238-0111 神奈川県三浦市初声町下宮田 261-5
代表 高橋 伸和 E-mail: info@koajiro-higata.com
TEL.046-889-0067 (仲澤)
URL: http://www.koajiro-higata.com
年会費: 一般会員 ¥1000 賛助会員 ¥5000 (入会金不要 7月~6月)
郵便振替: 00260-4-21569 小網代の森と干潟を守る会

第 115 回自然観察&クリーン

“観察会日誌カニと貝”

天気予報を気にしながらも三崎口駅にはつぎつぎと参加者が集まり、空模様もだんだん良くなって梅雨空のなかラッキーな観察会が開催できました。

いつものとおりバス組と徒歩組に分かれて森をめざします。気温も上がりだして農道では汗をかきながらのハイキングとなりました。遠く伊豆半島の上には層雲や積乱雲も見え隠れして天気不安定な様子が伺われます。湿った畑の土の上にはノウサギの足跡がくっきり残りピーターラビットと農家の追っかけごっこが目にかびます。北の尾根道から森に入ると木陰はぐっと涼しくなり、ヤマユリが重たい花をたれていました。



今回の観察会は干潟のカニや貝の観察が目的です。大蔵緑地で長靴に履き替え採集用のバケツと網をもらって干潟へ向かいます。潮の引き具合があまり良くないと予想でしたが、河口の石橋から干潟に入ると少しずつ潮が引いてきてチョコガニたちが元気に出迎えてくれました。毎度見慣れたはさみ振りの光景ですが何度見てもつい見つめてしまうひょうきんな動作に、初参加者の皆さんはそれこそ歓迎を受けているように感じるひとこまで。はさみを上げたときに見える青紫色のおなかの模様がひとときわくつき美しく輝きます。子供たちは捕まえようと手をのぼしますが、そのたびにサツ穴の中へ逃げ込まれ延々とモグラたたきならぬカニたたきを続け

ています。

干潟やそれに続く芦原には大小さまざまな穴があいています。それぞれの穴はそれぞれの生き物の住まいだということは想像できますが、さて何が入っているのかというとさっぱりわかりません。チョコガニやアシハラガニのように出たり入ったりしてくれれば、家主さんがわかるのですが・・・。

そこでジャジャーと現れた助っ人が、今回の観察会の初めに参加者の皆さんにおもてめいただいたNPO小網代野外活動調整会議が発行した「小網代干潟観察安全ガイド」です。ほんの一枚の絵地図ですがこのガイドを片手にぐるっと周囲を見渡すとあらあらふしぎ、さっきまで見えなかったさまざまな干潟の生き物が自分の足元にざわざわとうごめいているのが見えてきます。ほんとうに足の置き場にこまってしまう。干潟を歩くときは濡す



じを通りましようという意味がよくわかります。今回ゴムぞうりを持参した方がおられました、干潟には危険な生き物や、危ない貝殻などもあり、ぜひ長靴をご用意ください。

講師の小倉さんが終わりの会でおっしゃった、「このスガイの蓋をお酢に入れるとくるくるまわるのを、むかしの子供たちは楽しんだ。」とのひとことに意味がわからず。くわしく説明していただくと、藻におおわれた 2 センチくらいの小さな巻貝ですが、ゆでて食べるとサザエとおなじ味がして、その残った小さなふたをお酢のなかに落とすと、貝殻が酸で溶けるときの勢いでくるくる回るとのことです。どなたか試されたことのある方はご報告ください。

(本日の参加者大人 11 名、子供 5 名、スタッフ 8 名)

(文と絵 高橋伸和)

※ 観察会は NPO 法人小網代野外活動調整会議と共催で実施し、アカテガニ広場や倉庫を使わせていただきました。

参加者のメッセージ

ていねいな説明をしていただき、ありがとうございました。ことりのさえずり、景色全体、うみ、良かったです。

かおる

カニがいっぱいいて楽しかった。

しんご

本日はありがとうございました。機会あれば又参加させていただきます。

秀雄

なかなかふだんこれない所に連れていただいて、有難うございます

すずきみどり

今日は、ありがとうございます。

皓太

干潟を下りる石橋にフタバカクガニを見て、すぐにチゴガニ、フジツボ、ウミニナ、ナマコ、ソトオリガイ、ヒザラガイ、スガイなどカニ類、貝類、その他の生きもの……頭が混乱するほど楽しい観察会でした。小倉講師に感謝

須田漢一

久しぶりに童心にかえて生物探しをしました。ひざたけの長靴は必須ですね。楽しい観察会、ありがとうございました

佳代

カニがいっぱいいたのしかったです。

りずき

子供がまんきつしました。ありがとうございます。

浅野

カニ学の講習を受けて少しだけわかったように思う。カニを食べる時はおもしろい出します。

坂井

カニや貝の解説ではよく分かりました。晴天に恵まれた楽しい観察会でした。濃い藤色のアオサギの羽を 2 枚も拾いました。

S 記

初めての体験でたのしかったです。

佐々木

たくさんのカニに出会えたのは楽しい体験でした。ありがとうございました。

足立

楽しかったです また来ます
ありがとうございました

清水

楽しただけでなく勉強にもなりました。カニも面白かったけど、トリもスゴかった！！

数明

カニがたくさんいて楽しかったです！
そして、カニの色々なことを知れて良かったです！

茉鈴

うみのいきものがいっぱいいたのしかったです。

海琉

随想 小網代でんてん ⑦

似て非なる — キツネアザミ

須田漢一

ボランティアウォークで小網代の森に入ると、足もとで声がかかった。

見ると、アザミのような草が葉を展^{ひら}げている。なにアザミかな、と手をふれる。葉がやわらかく、刺^{とげ}はない。何か、だまされたみたいだ。なんだろう。錆^{さび}かかった脳の中から、キツネアザミの名が飛びだした。

キツネアザミは休耕田など荒地地に生える越年草で、ロゼットの状態で冬を越す。葉は羽状に切れ込み、裏面に綿のような毛がびっしりと生えていて、ふれるとざらざらする。頭花は紅紫色でアザミに似ているが、よく見るとかなり違うことからキツネの名がついた。

小網代の生きものを調べたりリストにキツネアザミは載っていない。成長すると草丈が60センチから1メートル近くになり、枝を分けて多数の花をつけるので目立つはずなのに、なぜか…。人が持ち去ったのかも知れないし、伸びる前に刈ら

れてしまったとも思える。以前、この場所は耕作をやめてからアズマネザサにびっしりと覆われて光が射しこまず、他の植物の育つ余地もなく、日照が好きなアザミ類は姿を消してしまった。今年(2012年)目にしたのは、ササが刈り払われたからだ、といえる。

キツネアザミの原産地は、インド、オーストラリアで、日本には有史時代の初期に中国大陸から帰化したといわれる。もともと日本人はそれ以前から活動していたのだから、その人たちと共に暮らす道を選んだキツネアザミは、人に付き沿うように各地へ根を下ろした。

人はかつて、食べるに値しない草には見向きもしなかった。まして本草学^{ほんそうがく}の勃興^{ぼつこう}する以前、自然物に対する細かな探求などは無関心だったであろう。とうぜん雑草といわれるものの記録など残っていない。そうした時代に中国大陸や朝鮮半島から入ってきた植物は、あたかもこの国に始めから自生していたかのように、自分たちの住む場所を広げていった。いま小網代の道で見かけるスイバ、ハコベ、ナズナ、トウダイグサ、オオバコ、カモジグサ…。そしてここにあるキツネアザミなどは、人の生活と共に生きて

きた証^{あかし}となる草ぐさだった。

いつであったか近郊の草地で、真直ぐに伸びたキツネアザミの群生を見た記憶がある。それは西洋のある画家が描いた、物思いに沈んでほっそりと立つ貴婦人のようだった。

そうした姿をもういちど見たい。願うことなら、花が開き、冠毛を付けた種子が飛び去るまで刈らないで欲しい。アザミに似た非なる草かも知れないが、キツネアザミを見ることによつて、ここが田んぼだったところに近づいてきたのだ、と思えて嬉しくなる。

キツネアザミは別段、人に害を与えるものでもない。このまま、二年草としての短い一生を全う^{まっとう}させてあげたい。

— 初夏、キツネアザミが立ち並ぶ草原の風景を思い浮かべるのは、キツネにだまされた夢であろうか。

(2012.4/15 観察)

○4/29 丈が80センチほどに伸びて、花が開いていた。

○5/20 茎にヤブカラシが巻きつき、種子は風に乗って飛んでいった。ヒメジョオンとススキが周りを囲んでいた。

干潟の雑学 (8)

鉄の歯と石の目を持っているヒザラガイ

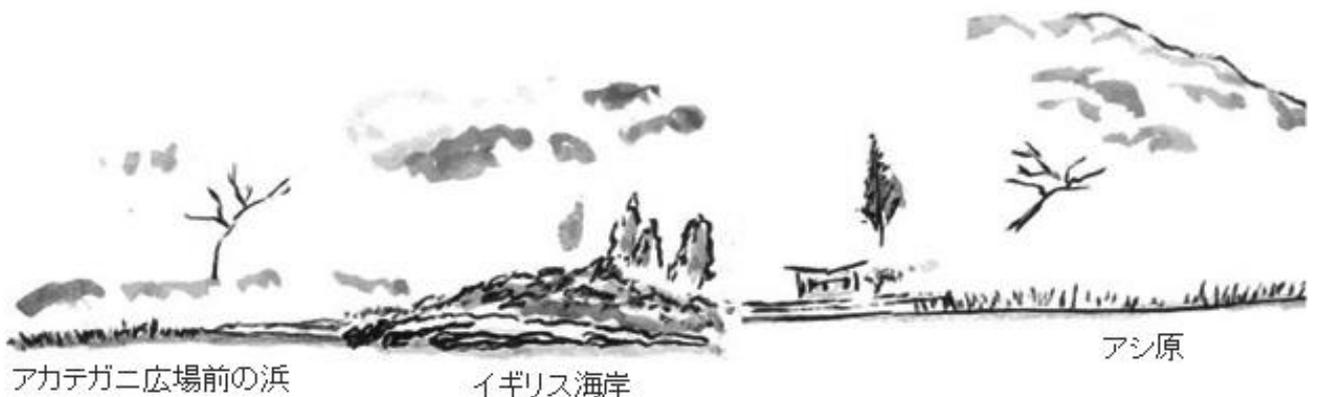


貝の仲間、軟体動物は巻き貝、二枚貝など大きく分けると8つのグループがあります。

ヒザラガイ類は多板類といわれ、体は8枚の殻板で覆われています。世界では約800種で、日本周辺には100種ほどが知られていますが、今後150種以上になると思われます。ヒザラガイ(*Acanthopleura japonica* (Lischke, 1873))は漢字では膝皿貝あるいは火皿貝と書きます。また岩からはがしたときに丸まった形からジイガセ(爺が背、石籠)とも言います。

ちなみにババガセ(*Placiphorella stimpsoni*(Gould, 1859)、ヒゲヒザラガイ科(Mopaliidae)で、相模湾の潮間帯でも見られます)というヒザラガイの仲間もいます。ヒザラガイは焼いて食べるとアワビに似た味がするようです。ヒザラガイ類の方言には南日本で多く用いられていたクズマ系統と紀伊半島や関東で多く用いられていたコゴ系統があります。三浦でも昔、ヒザラガイをコーゴとかコゴと呼び、ゆでて殻をとり酢の物にして食べていたそうです。ヒザラガイ類はすべて海産で、海岸の岩の上などで生活し、多くのヒザラガイ類は夜の干潮時に休息場所から動き出して、岩の表面に生えている小さな藻類などをヤスリ状の歯(歯舌)で削り取って食べています。そして潮が満ちてくると、元いた場所に戻ってきます。ヒザラガイはさまざまな環境ストレスや捕食者の危険などを回避するために体がびったりと収まる場所や日陰になる場所を確保して昼間は休息しています。この休息場所を「家」といい、この行動を「帰家行動」といいます。ではどのようにしてヒザラガイは「家」に帰ってこられるのでしょうか？そこでどうやって「家」に帰っているのかを調べる実験が行われています。仮説としては、その1：海岸の地形を記憶している。その2：移動した距離や道順を記憶している。その3：這い痕に残った粘液を道しるべにしている。その4：「家」から匂いの信号が出ている。その5：体内コンパスを使っている。などが検討されています。

これまでのところ這い痕の粘液を道しるべにして帰家しているという仮説が有力ですがまだよくわかっていません。また、ヒザラガイの場合帰家率が30から40パーセント程度と低く、どのような状況で帰家したりしなかったりするのかも不明です。



ヒザラガイ類ではそのヤスリ状の歯（歯舌）に鉄を成分とするマグネタイト（磁鉄鉱）が含まれていることが知られています。解剖して取り出したヒザラガイの歯舌が磁石に引きつけられることで確認できるので試してみたらどうでしょう。マグネタイトが歯舌の材料として使われるほかの成分よりもはるかに硬いことから、巻貝のなかまに比べてより効率的に摂餌する能力をもつことが知られています。しかし、生物の体を作る材料として非常にまれな物質であるマグネタイトがヒザラガイ類の生活にどのようにかかわっているのか、確かなことはわかっていません。ヒザラガイ類のもう一つの注目する点は、光感覚細胞を含んだ **aesthete**（エステート）と呼ばれる器官が殻を貫通して表面に分布していることです。しかし、この細胞がどのような役割を果たしているのか、なぜこのような巨大な細胞が必要なのかということについてもわかっていませんでした。

ヒザラガイの目の話

アメリカの大学のダニエル、スパイザーさんの研究によると、ヒザラガイの目はアラレ石（鉱物アラゴナイト）でできているそうです。アラゴナイトは方解石と同じ炭酸カルシウムの結晶です。このヒザラガイは小網代にも暮らしているヒザラガイ *Acanthopleura japonica* (Lischke, 1873) と非常に近い仲間で、アメリカのカリブ海の近くに暮らしているヒザラガイの仲間の *West Indian fuzzy chiton*, (*Acanthopleura granulate* (Gmelin, 1791)) というヒザラガイです。ヒザラガイ類は背中に8枚の殻板を持っています。殻板の表面にはエステート (aesthete: 枝状感覚器) と呼ばれる光感覚細胞を含んだ器官が分布していることが昔から知られています。そしてはっきりとした単眼を殻板に見出せる仲間がこのアメリカのヒザラガイです。単眼は8枚すべての殻板の全域にわたって分布していますが、前方の殻板の上にたくさん見られます。そしてこれらの単眼は色素層、網膜、レンズをそれぞれ含んでいます。この研究で、ヒザラガイのレンズが鉱物アラゴナイトから作られていることが判明しました（ほとんどすべての生物のレンズはタンパク質からできています）。



アラゴナイトのレンズは複屈折をします。そして、目を持っているこのアメリカのヒザラガイは空気中と水中の両方でイメージを捉えることができます。この研究ではヒザラガイの目の光学モデルを用いて解析し、アラゴナイトのレンズによって水中でも空気中でも焦点の合ったイメージがヒザラガイの網膜にできることが示されています。つぎに、ヒザラガイの空間の視覚のテストを行っています。このヒザラガイは水中にいるときに、黒い円盤が突然現れると反応しました。空気中でのテストでも9度の角度から現れる黒い円盤に反応しましたが、これに対応するグレーのスクリーンには反応しませんでした。(明るさの急激な変化)これらのテストの結果はヒザラガイのレンズが水中と空気中の両方でイメージを形成するという光学モデルに矛盾しないことがわかりました。また、他の実験も加えたテスト結果からこのヒザラガイでの視覚によって引き起こされる防御反応が空間的な情報と全体的な明るさの減少の両方によって影響を受けることもわかりました。つぎに、目を持っているヒザラガイ *Acanthopleura granulate* (Gmelin,1791)と目を持っていないヒザラガイ *Chaetopleura apiculata*(Say in Conrad,1834)を用いて空間の視覚行動の実験を行っています。結果は目を持たないヒザラガイは明るさの非常に小さな変化に対して敏感ですが(9度の角度から現れる黒い円盤とこれに対応する明るさの急激な変化にも反応しました)、目を持っているヒザラガイは9度の角度から現れる対象物(黒い円盤)を区別することが可能であることがわかりました。(1度と3度では反応しませんでした、そして27度では黒い円盤にもこれに対応する明るさの急激な変化にも反応しました)複屈折のアラゴナイトのレンズを持っているヒザラガイは水中と空気中の両方でうまくイメージを捕らえることが可能であり、潮間帯で暮らすヒザラガイにおいてはタンパク質からできている目よりもアラゴナイトの目のほうがより有効のようです。ヒザラガイ類は他の貝類に見られない特徴をもつ一方で、軟体動物のなかでも原始的な特徴を持っています。消化管の蛇行を除いて完全に左右相称であることや、*ベリンジャー幼生を経ないでトロコフォア幼生から定着する点、殻にみられる節構造など環形動物との共通性が見られます。これらのことからヒザラガイ類はたいへん興味深い貝の仲間です。小網代干潟のイギリス海岸ではいつでも見られる干潟の仲間です。干潟に出かけたときには是非出会ってください。

*軟体動物の一般的な発生様式は卵割後にトロコフォア幼生からベリンジャー幼生を経て成体になります。巻貝類、二枚貝類はこのように発生しますが、ヒザラガイ類ではトロコフォア幼生から変態して成体になります。

参考資料： 海の味—異色の食習慣探訪—、山下欣二著、八坂書房、1998
 日本貝類方言集、川名興、未来社、1998年
 千葉生物誌 24(1,2) 千葉県生物学会、1975
 三浦半島の民俗 I 神奈川県民俗調査報告④、神奈川県立博物館、1971
 遺伝、vol.41,no.4:1987
 遺伝、vol.55,no.3:2001
 アメリカの大学のダニエル、スパイザーさんの研究



小倉 雅實

やまゆり 咲いた

中井 由実

りんと伸びる鉄砲百合よりも
ゴージャスなカサブランカよりも
一番好きな百合だから
谷から谷へ 探しながら歩いていた
小網代が
まだ ゴルフ場開発に怯えていた頃

森の保全が決まって ひと安心し
こうして 干潟に向かう私たちを
今 やまゆりが
べんけい橋のたもとまで
迎えに来てくれた

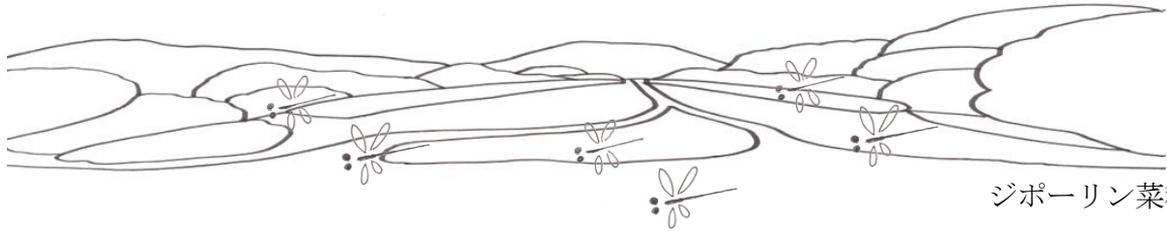
夕暮れに浮かぶほの白さ
静かに灯る標のように



お話・伸さんの山百合の絵からできた詩です。小網代の森は整備中だから、今は会いには行けない。花の方で来てくれるなんて、会員冥利に尽きるというものです。

干潟のゆりかごの小さな住人 その10

よしはらのゆりかごからは、出てくるわ。出てくるわ。



ジポーリン菜穂子

東京、スペインのマドリードとともに、2020年オリンピックの候補地として名乗りをあげているトルコのイスタンブールは、1930年のトルコ革命以後の名前。それ以前は、コンスタンチノープルでした。呼び方が違うのは、国の名前にもありますね。ビルマがミャンマー。セイロンからスリランカ。ザイールは、今はコンゴ共和国だそうです。自国内での呼び方と国際的な名称が違うことも多いですね。たとえば、ジャーマンは、ドイッチェランド。フィンランドはスオミだそうです。ジャパンも、私たちの間ではニホンとかニッポンですね。その昔は、「大八州」だとか、「敷島」とか。それから大陸からは、「倭」と呼ばれたりしていました。「秋津島」というのもあります。トンボの国という意味だそうです。

『日本書紀』では、私たちの国の名前は「豊葦原千五百秋瑞穂国」。『古事記』には、「豊葦原之千秋長五百秋之水穂国」とあります。「千五百秋」は、限りなく長い年月。「千秋長五百秋」も、同じです。千年も五百年も。実りの秋が何百回も何千回もやってくるのですね。「瑞穂／水穂」は、瑞々しい稲穂ですね。それぞれ、「とよあしはらのちいほあきのみずほのくに」、「とよあしはらのちあきながいほあきのみずほのくに」と読みます。豊かに葦が生い茂る原が広がり、くる年もくる年も、瑞々しい稲穂が実る国、なわけです。ほおお。

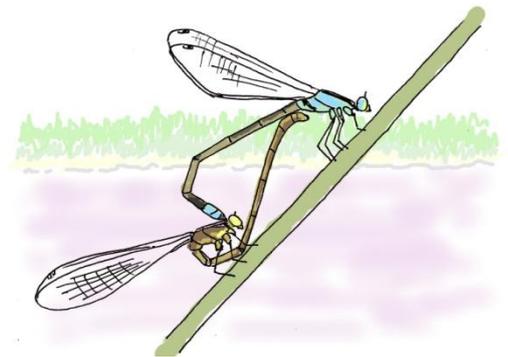
水辺に葦原が広がるのは、日本の原風景だといえるわけですね。それが、小網代の干潟にも広がっています。アシ、またはヨシ（葦、芦、蘆、葭／*PHRAGMITES AUSTRALIS*）。池や沼、川辺、湿地や干潟、汽水域に生えるイネ科の多年草です。オギやススキともよく似ています。たいてい人の背丈ほどですが、3mくらいになるものもあるそうです。茎が固く、中が空洞で節があります。初めて芽生えたものが、葭。穂がまだ出ていないものを蘆（この略字が芦です）。そして立派に育ったものを、葦と呼ぶそうです。そして、縁起をかついで、ということでしょうね、アシは悪しなので、ヨシにしてしまった、とされていますね。平安時代中期にできた『倭名類聚抄』や『本草和名』には「蘆葦」や「蘆根」の和名は「阿之」などという表現が見られます。江戸時代の『本草綱目啓蒙』では「アシ」とともに「ヨシ」も見受けられます。植物分類学では「ヨシ」が標準和名だそうです。

琵琶湖あたりでは、オギを「アシ」。ヨシを「ヨシ」と呼ぶようですよ。ヨシは、良い葭簀が出来ますが、オギの中は海綿状になっていて、商品価値がないからだそうです。また、使えるヨシをオンナヨシ、ヨシでないものをオトコヨシ、と呼ぶ地方もあるそうです。ウッフ。葦からは、葭簀ばかりではありません。簀も出来ます。

垣根にもなります。藁わらの代わり、あるいは、藁といっしょにして屋根を葺くこともできます。藁に比べて、葦は耐久性や排水性に優れているようで、葦屋根の家は夏涼しく冬暖かなのだそうです。田んぼには、葦の束を敷き詰めて、埋め込むと田んぼの排水がよくなるそうです。背の高いまっすぐな葦がよいそうです。舟だってできるし。衣類や寝具にもなります。腐葉土に入れると、排水性のすぐれた良質の土ができあがるそうです。紙だってできます。薬にも、したそうですし。若芽は食料にもなったそうです。楽器にもなりますね。葦笛、それから雅楽の篳篥（ひちりき）のリードの部分。ありとあらゆるもの。用途が広いですね。燃料にもなります。でも、今では、利用も手入れもしなくなっただので、良質な葦が取れないとか。

初冬に、葦を刈り取ったあと、葦原に生えていた草を乾燥させ、火をつけて焼きます。これで、病気のもととなるものや、葦がまっすぐ伸びるためにおジャマになるものが煙になってしまうわけです。葦は地下茎なので、大丈夫なのだそうです。春になると若芽がすくすく伸びてくるのですね。「よし焼き」と呼ぶそうです。今では、珍しい風景になってしまいました。煙がご近所迷惑だからでしょうか。渡良瀬遊水池では、よし焼きの日を予告して、ホームページなどでも周知をはかっていますね。未来に伝えるべき大切な行事と考えるからですね。その日は洗濯物を干さないように、窓の開閉に注意とのこと。スマホでも焼き畑農業を行っていますが、ついこの間まで、シンガポールなどが、スモッグで、それはたいへんだったそうです。共存できる方法が見つかることを願うのみです。

葦を刈り取った後の短いひと節（ひとよ）に切ない恋心を託した歌が、百人一首に、ありますよ。



難波江の葦のかりねのひとよ一夜ゆゑ身をつくしてや恋ひわたるべき

難波江は大阪淀川下流域あたり。歌枕です。以下、それぞれの言葉の意味が二重にあります。「かりねのひとよ」は、葦の刈根の一節／仮寝（ゆきずり）の一夜。「みをつくし」は、漣標／身を尽くす。漣標（漣つ串）の漣は水路。水路に杭を打ち込んで、小舟の航路がわかるようにしたものです。大阪市の市章が漣標です。京阪電車の社章にも。

さて、句は、一夜かぎりのかりそめの恋のはずだったのに、身を尽くし、ずうーっと先の先まで、恋し続けるのでしょうか。となりますね。（恋のアルアル？）同じ句を干潟バージョンで読んでみましょうか。淀川下流には、葦を刈った後の一節があるから、漣標をたよりに、（そして、恋でなく「請い」と読んでしまっ）、お願いですからあ、という気持ちで、舟で航ることだなあ。というのはどうでしょう？ このお願いは、舟が乗り上げて、転覆しないように、気をつけながら、とも取れるし。あるいは、また、来春も良い葎（若芽）が芽吹きますように、という祈

りをこめながら、舟でゆく、というのはどうでしょう？（干潟アルアル！！）さて、恋の匂なのか、干潟の生きもの万歳の匂なのか。皇嘉門院別当こうかもんいんのべっとうという平安貴族女性の匂です。

恋の原風景として描かれた葦原は、まさに、いのちの原風景でもあります。水辺があると、まず最初に棲み始めるのが葦なのだそうです。そして水辺が葦原になると、棲み易くなるのでしょうか。そこに、オギやマコモなど、別の植物も、やってくるそうです。水がきれいになるからかもしれません。葦の水中の茎についての菌や微生物は、水の汚れを分解してくれるでしょうし。葦そのものも、水中の窒素やリンを養分として吸い取りますし。葦が水の流れを弱くして、それで汚れが下に沈み、澄んだ水辺になる、ということもあるのでしょうか。ヤナギやハンノキといった樹木もいっしょに生えるそうです。そうなってくると、鳥や魚たちにとっても、格好の隠れ場所になりますね。魚の卵もたくさん産みつけられ、大きくなるまで暮らすそうです。ヨシノボリやスジエビなども葦原を住所にしているそうですよ。ホタルの餌になるカワニナも葦にくっついてるそうですし。まさに干潟のゆりかごです。これをヨシ群落と呼ぶそうです。

山本周五郎の『青べか物語』でも、葦原の心地よさが描かれていますね。

月はかなり西に移って、空には雲の動きも見えた。
岸の草むらでは虫のなく声がしきりに聞こえ、
微風が葦をそよがせると、葉末から露がこぼれ、
空気がさわやかな匂いに満たされた。

江戸川のこの一帯、その風景の一部は、今では、三番瀬さんばんせとして保全されています。

ところで、葦原、ヨシハラ（あるいはアシハラ）と読みますよ。念のため。ヨシワラと読むのは、現在の東京千束町のあたり。江戸幕府認定の遊郭です。吉原という漢字を当てます。これも、辺りが葦原だったから。やはり、縁起をかついで、葎原から吉原に。芝居町と並び、江戸時代の一大エンターテイメントセンターでした。ひと足はあれば、貴賤上下なしのワンダーランド（だったはず）です。お芝居の歌舞伎は、平成の今、日本を代表する文化なのに、吉原ときたら。と、忘れられていく吉原遊郭文化を嘆いていたのは、池波正太郎さん。この秋、大英博物館では、この時代の美術（枕絵です）の特別展が、鳴りもの入りで、開かれますが、日本では、なんだかの法律にふれてしまうので、宣伝もできないそうですね。おやおや。



参考にした本/HP:

桜井善雄 『水辺の環境学』 (1991 新日本出版社)

『神々のいる風景』 赤坂憲雄ほか (2003 岩波書店)

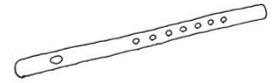
渡良瀬遊水池: <http://watarase.or.jp/news/H25yosiyaki/H25yosiyaki.html>

など

なんと! 葦原は世界の原風景でもあります。

次回も葦についてですが、舞台が日本だけでなく世界にも移ります。

どうぞお楽しみに! 笛がお好きな方は特に! よろしく願いいたします。



小倉さんの干潟愛コーナー

初夏の小網代の葦原はアシとアイアシの緑がきれいですね。

葦原に暮らす生き物の代表は昔からアシハラガニなどのカニでしょう。

万葉集には“難波乃小江ノ葦河爾・・・”とあり、倭名類聚抄にも“葦原蟹”とあるようです。小網代でもアシハラにアシハラガニやハマガニが暮らしています。アシハラガニは雑食性が強く多様な餌を食べていますがハマガニは季節的に変動する葦の葉や茎を主食にしています。アシハラガニの繁殖期は夏ですがハマガニは冬です。ハマガニは葦が枯れて食べ物がなくなる季節を卵、幼生期で過ごし、春葦原が芽吹く時期から成長します。ハマガニの方がアシハラガニよりも葦に依存した生活をしているようです。小網代の葦原ではここ数年ハマガニの数が増えています。小網代の葦原が元気になってきたのでしょうか。

つうしん掲載 前シリーズをまとめた

『小網代の森の住人たち』 絶賛発売中!!

国際アジア学会、2013年ベスト・スペシャリスト賞受賞!!

小網代の森の住人たち

著者 ジョーリン福島菜穂子

出版社 八坂書房

定価 1500円+消費税75円=1575円

刊行日 2011年6月25日

変形 A5判、144ページ ISBN978-4-89694-975-9

お求め方法:

① 小網代の森と干潟を守る会より購入すると 消費税分サービス **なんと1500円に!**

■ 直接販売 観察会等イベントの際にお求めください。

■ 郵便振替 口座番号 00260-4-21569 (加入者名:小網代の森と干潟を守る会)
送料(1冊160円)を添えてお振込ください。送料を入れて1冊1660円になります。
振込手数料はご負担ください。おまけにポストカードをプレゼントいたします!

② 書店で購入・お取り寄せください。

③ アマゾン(Amazon.co.jp)他のオンライン書店でも購入できます。

お問合せ先:小網代の森と干潟を守る会 浪本 BYT00657@nifty.ne.jp



まとめて読み返してみると
新たな発見が!

カニグッズ(6)

◆ アカテガニ募金のかにグッズ

今年の夏もNPO法人小網代野外活動調整会議がカニパトロールを小網代干潟で実施の予定です。その際共催させてもらっている小網代の森と干潟を守る会ではアカテガニ募金の参加の印を提供しています。

今回は一番、新しいカニパトグッズの紹介です。



No.12 リユース防水でかニバッグ

廃棄されたカニパトのユニフォームの胴長靴の使える部分で作った防水バッグ、カニ柄の布にカニパトで使っていたフェルトのカニバッジを縫い付けました。世界で唯一の作品です。細かい所には目をつぶって下さい。



No.13 カニをデザインした小さな陶器のいれもの

高さ10cm程度、ドライフラワーなら確実に、水漏れがなかったものに当たった方は超ラッキー。三浦で育ったオオシマザクラを焼いてできた灰を釉薬にしてできています。どこかに桜色が現れています。



No.14 アカテガニを描いた壺をだいた一輪挿し

いろいろな形にアカテガニのついた壺を抱かせました。中は空洞なので、水がたくさん、入ります。大きさは10cm程度、小さい空間を飾って下さい。



番外これは守る会が会の資金調達用にスタッフの撮った写真をはめ込んで作成したキーホルダー。作るのが楽しかったと評判の一品。1個300円で例会やカニパトの折に販売しております。

この他、紹介ずみのかニを中心に粘土の世界にはめ込んだカニのペンダント(つうしん第126号 カニグッズ(3)で紹介済み)が多数、干潟で皆様とのおめもじをまっております。

カニグッズ収集家 ときにはカニグッズ作家 宮本

8月23日 海老名市にあります富士ゼロックスの工場で開催される夏祭りに参加します。

カニつりゲーム、カニの小壺などの販売もします。お近くの方、お出かけください。

* 現在「アカテガニ募金」はNPO法人小網代野外活動調整会議が預かり、トラスト財団に寄付をしています。

* 現在カニパトロールはNPO法人小網代野外活動調整会議が実施しています。

スタッフコラム

◆大磯アオバト遠足

大磯のアオバトと平塚のたなばたへ参加しました。
大磯小磯のように、波の荒い海岸です。

アオバトの飛来する岩礁の照が崎海岸、
1時間で約200羽を確認、5羽から30羽位の集団で丹沢から飛来します。

窪みに溜まった海水を吞んでいます。

この日、7月6日 推定1000羽は飛来したことでしょね。

何度か来てますが、今日が最高でした。

大磯海岸へ注意看板が掲示されていました。

「湘南海岸に猛毒のヒョウモンタコ、触れないでと写真付きで表示」

S.S



大磯照が崎のアオバト観察のご案内、ありがとうございます。永い間のあこがれの鳥でしたので、あっけなく実現してしまったと思います。「一刻でも早く行きたい」の言葉が分かりました。幸い、200羽は数えることができました。

鳴立庵などは思いがけない訪問でした。西行がこのあたりを訪ねて、あの夕暮れの歌を歌ったとはあんまり自覚がなかったのです。古文を一生懸命やっていた高校時代を思い出しました。あの時、教えてくれた派手な服装の有名教師のことも…。3人でアオバトをいれて投句をしてみました。

平塚の日本三大七夕も皆さんと一緒になければ見られないものでした。博物館も美術館も行きたい所でした。次の機会を待ちますね。

大磯にはもっともっと面白い場所がありそうですね。江戸時代や明治以降の政治のすきな方はもっと喜ばれるでしょうね。私は個人的には今度は湘南平を巡るハイキングに挑戦したいです。

「こころなき 身にもあわれは知られけり 鳴立つ沢の秋の夕暮れ 西行」

M.M

写真：松下景太 他

小網代の森と干潟を守る会の活動

- 4/29 スタッフ会議(引橋 総合福祉センター)
- 5/12 鶴見川源流祭に出展
- 5/18 通信 128 号印刷(横須賀市市民活動サポートセンター)
- 6/1 公益社団法人日本ナショナルトラスト協会総会に出席
- 6/15 第 115 回自然観察&クリーン「小網代干潟のカニと貝 ヤドカリもね！」

第 24 回小網代の森と干潟を守る会総会のお知らせ

日時 2013 年 8 月 25 日(日) 13 時 30 分～15 時 30 分

場所 三浦市初声市民センター講義室(京急・三崎口駅下車 徒歩 15 分・バス 下宮田下車1分)

第 1 部 総会

第 2 部 記念講演「25年春 小網代一般開放にむけて」

岸 由二氏(NPO法人小網代野外活動調整会議代表理事 慶應義塾大学名誉教授)

是非、ご参加下さいますよう。なお、ご都合がつかない場合は、同封の委任状の送付を
8 月 24 日までに お願いいたします。

ご寄付ありがとうございます

会の活動費 杉崎泰章 大高義彦 須田漢一 柿島京子 安西章次 野本哲夫 鈴木カヲル
須藤伸三 盛野成信・雅子 祖父川清治 加藤利彦 SHO² 宮本美織 橋美千代
鈴木清市

森の応援金 橋美千代 橋ちひろ 倉内太輝 仲澤イネ子 浪本晴美 浪本梓 杉崎泰章
奥津信子 田中幹人 蓮尾もと子 岸 修 土屋圭子 辻 晴一
ジポーリン菜穂子 ジポーリン周樞 河内町子 佐藤 高 木内恭子 山本勝久
大泉繁子 加藤紀子 福田みどり 藤崎英輔 山本述子 藤野秀代 高橋宏之
岡見義昭 上田尚美 坪田弥乃子 北村和子 三本保子・裕子 金木公子 大塚 敏
須藤伸三 盛野成信・雅子 吉永浩三 高間玖爾美・玲江 大川須美 小倉雅實
柴田朱美 SHO² 西川次代 小田島一生 飯田久仁子

以上の方からご寄付をいただきました、ありがとうございました

NPO 法人小網代野外活動調整会議からのお知らせとお願い

※ 小網代の森と干潟を守る会は NPO 法人小網代野外活動調整会議の活動を支援しています。

カニパトロールのお知らせ

- 2013 年度カニパトロールは以下の日程で行います。

I 期： 7 月 27 日（土）・28 日（日）

II 期： 8 月 10 日（土）・11 日（日）

III 期： 8 月 24 日（土）・25 日（日）

17 時～20 時、小網代湾奥・アカテガニ広場で実施します。

- カニパトに参加されるにあたって、ご注意いただきたいこと

- 実施要領、注意事項、装備については必ず事前に NPO 法人小網代野外活動調整会議ホームページの情報をご確認ください。
- 当日荒天（雨・強風・波浪・雷等）により、観察中止になることがあります。（中止決定次第、ホームページ <http://www.koajiro.org/> に掲載されます。）
- 森の中にトイレはありませんので、事前に森の外でお済ませください。（三崎口駅構内トイレ、シーボニア前公衆トイレが拝借できます。）
- 1 時間ほど水の中に立って放仔観察をしますので、水に入れる装備（長靴が最適、サンダル危険）、懐中電灯をご持参ください。

お問い合わせは

NPO 小網代野外活動調整会議事務局へ

TEL: 045-540-8320

URL: <http://www.koajiro.org/>

- ☆ 小網代の森と干潟を守る会は、8 月 10 日のカニパトロールに参加します。
会からのお知らせは次ページ



トラスト緑地保全支援会員 & 小網代応援団募集

◆トラスト緑地保全支援会員になるには

トラスト財団のパンフレットにある申込書に記入して郵送します。またはトラスト財団のホームページ (<http://ktm.or.jp>) から、申し込むことができます。支援したい緑地にはぜひ「小網代の森」をお選びください。

通常のトラスト会費(大人 2000 円、中高生 1000 円、小学生 500 円、家族会員 3000 円)の他に 3000 円の支援会員会費が必要です。

よろしくお祈いします

◆小網代応援団に入るには

NPO 法人小網代野外活動調整会議（電話：045-540-8320 E-mail: koajiro@koajiro.org）までお問い合わせください。

「小網代応援団」に登録していただいた方には、年に数回の特別観察会をご案内いたします。森と干潟の様子をしっかりと見守り、楽しみながら、大好きな森を育てていきましょう。

第 116 回自然観察 & クリーンのお知らせ

主催：小網代の森と干潟を守る会 共催：NPO 法人小網代野外活動調整会議

◆ カニのあかちゃんといんにちは！ アカテガニの放仔

真夏の大潮の夜、アカテガニのかあさんたちが山をおりてきます。お腹いっぱい抱えたあかちゃんが生きるためには海が必要だから、あかちゃんを海に放すには今夜がいちばんよい日だから、かあさんガニはひたすら海を目指します。卵のように丸くなって母さんのお腹にいたあかちゃんは海に放たれるとすぐにゾエア幼生の姿で泳ぎだし、大潮の流れに乗って外海へと旅に出ます。人間の私たちは海の中から静かにアカテガニのお産を見守りましょう。そして旅立ち前のあかちゃん（ゾエア幼生）の姿や泳ぎも観察したいと思います。



日 時：8月10日（土） 16時 三崎口駅前集合

解 散：21時 三崎口駅前解散（中止の場合は8/11順延）

持ち物：長靴、お弁当、飲み物、雨具、虫よけスプレーなど防虫グッズ、懐中電灯、着替え

① 徒歩コース：駅から干潟まで、スタッフの案内で三戸浜の眺望を楽しみながら、30分くらいの道のりを歩きます（熱中症対策を十分をお願いします）。

② バスコース：駅からバスで12分、シーボニア入口から白髭神社を通過して干潟に出ます。
（スタッフが同乗します）

* バス料金は片道260円、ファミリー割引期間中なので、（現金・PASMO・Suica・回数券でお支払いの場合）大人1名につき小学生のお子さん1名が無料になります。

※ ①、②どちらのコースも小網代の森と干潟を守る会のスタッフが往復のご案内をいたしますが、干潟ではNPO 法人小網代野外活動調整会議のカニパトロールに参加していただきます。

※ 雨にかかわらず、荒天（強風・波浪・雷等）の場合、観察中止になることがあります。
（カニパトを主催するNPO 法人小網代野外活動調整会議の判断に従います。
中止決定次第、ホームページ<http://www.koajiro.org/>に掲載されます。）

※ ご参加にあたっては前ページ・NPO 法人小網代野外活動調整会議のお知らせにある「●カニパトに参加されるにあたって、ご注意いただきたいこと」を必ずお読みくださいますよう、お願いいたします。

小網代 森と干潟つうしん NO.129 2013年7月20日発行

森も海も干潟も 奇跡の集水域生態系を未来の子どもたちへ

小網代の森と干潟を守る会

〒238-0111 神奈川県三浦市初声町下宮田 261-5

代表 高橋 伸和 E-mail: info@koajiro-higata.com

電話 046-889-0067 (副代表 仲澤)

URL: <http://www.koajiro-higata.com>

年会費：一般会員¥1000 賛助会員¥5000 (7月～6月 入会金不要)

郵便振替 口座 00260-4-21569 加入者名 小網代の森と干潟を守る会

* 既に退会のご連絡をいただいた方にも年度末(6月末)までお届けしております